
十四日午後三時半

隠れsugar

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

十四日午後三時半

【コード】

N9332U

【作者名】

隠れsugar

【あらすじ】

バレンタインデーの話

(前書き)

季節外れですね

【A】

ぼつり、と額に滴が当たり目が覚める。

目を開けるとそこに見えるのは、自分の部屋の白い天井……ではなく、灰色。

「……………え？」

一瞬状況が理解できずあたりを見回す。

コンクリートの床に寝転ぶ僕。

フェンスの向こうに広がる茶色い校庭。

どうやらここは学校の屋上のようだ。

いつも通り昼休みに来て、そのまま寝てしまったんだろう。

だとすると、五時間目の授業を受けに教室へ戻らないといけない。

今の時間を確認しようとして携帯を探す。

「……………ない」

学らんのポケットとズボンのポケットを調べるが見当たらない。

教室の机の上に置いてきてしまったんだろうか。

僕の通う中学では、学校への携帯電話の持ち込みに規制は無い。で

も、さすがに机の上に置きっぱなしにするのはまずいだろう。授業

中、しかも本人がいらないとなるとなおさらだ。

教室へ戻ろうか……。そう思っていたところで、再び額に冷たい雨

が落ちてきた。

「はつくしよん」

大きくくしゃみをする。

眠っている間に雨に濡れたということはなさそうだけれど、肌寒い

風が吹いているせいで風邪を引いてしまったかもしれない。

仕方なく教室へ向かうことにした。

二年三組の教室を目指して階段を下りる。

さすがに、授業中の教室に突入する度胸は無い。

もし、もう五時間目の授業が始まっているなら、この時間はどこかでサボって六時間目から授業を受けよう。

そう思つて廊下の隅から教室を覗き込む。が、予想に反して教室にはだれもいなかった。

「あれ？」

教室に近づき、中に入る。

携帯を探すが、机の上にも中にも無かった。家に忘れてきてしまったようだ。

黒板の上の時計で時間を確認する。二時過ぎ。ちょうど五時間目の真ん中にあたる時間だ。

午後の授業は全部教室でだったはずだけど、なんで誰もいないんだろう？

誰もいない教室内を見回し、黒板に目にとまる。

『三月十六日(月) 日直 川村』

今日は月曜日……？

そう思い、教室に張つてある時間割表に目をやる。

「月曜……五時間目は数学かあ」

数学なら教室でしているはずだ。

記憶を巡らす。

今日は本当に月曜日だったけ？

黒板の日付というのは割合適当なもので、数日前のものが書かれていたことも多い。

そう思つて、もう一度時間割を見る。

数学、英語、古典、世界史、英語 どの曜日も五時間目は教室での授業だ。

おかしいな。今日は何日だろう？

ついこの間「十三日の金曜日だー」って馬鹿を言いあった気がする

から……。

……あれ？……

十三日の金曜に六時間目の現代国語の授業を受けたことは覚えてい
るけれど、それ以降のことが思い出せない。
本当に何も思い出せない。

何か、大事な記憶が抜けてる気がする。

………分からない。

………怖い。

自分自身のこと分からないことが。

ただ、だからといっていつまでも学校にいるわけにもいかない。
平日なら五時半、土日なら五時には校舎は閉まるのだ。

幸い、日常生活に必要なことについての記憶は残っている。家には
辿り着けるはずだ。

「仕方ない。帰るか」

そう思い、教室の出口の方を向く。

と、教室の出入り口に人影が現れた。

「なんであんたがいるの？」

彼女の第一声はそれだった。

川村優菜。二年三組の学級委員。

その性格ゆえに味方も多いが敵も多い。（と思う）

僕自身は、特に彼女のことを嫌いだとか気に食わないとか思うこと
は無いのだけれど、ぶっきらぼうな物言いのせいもあり、彼女と話
をするのはあまり気分のいいものではない。

「お前こそ何しに来たんだよ」

不意を突かれて頭が回らない僕は、とりあえず時間稼ぎの質問をす
る。

「私は、忘れて帰った英語のノート取りに来ただけ」

そう言いつつ、彼女は自分の机から黄緑のノートを取り出す。

「ふーん。……あ、そういえば、今日って何日だった？」
自然な流れで聞いてみる。

「……三月十四日」

「十四日か……」

日付を聞いても何も思い出せない。

それが正しいのかどうかさえ。

「で、あんたはなんでいるの？」

「いや……それがさ……」

一瞬、真実を話すことを躊躇した。

普段の僕なら他人に自分のことを話すことなんてしない。

でも、自分のことが分からない恐怖が、彼女に僕の思ったことを話させた。

彼女と話すことで何か思い出せるんじゃないかという淡い期待も込めて。

目が覚めたら屋上にいたこと。

ここ数日の記憶があいまいなこと。

何か大事なことを忘れてる気がする事。

自分のことが分からないことが、どうしようもなく怖いこと。
全てを正直に話した。

「僕はどうしたらいいんだろう」

別に彼女に答えを求めたわけではなかった。

けれど、僕の話静静地に聴き終えた彼女は僕の目の前に立ち

「ねえ……手を出して」

と言った。

なんで、と聞こうとして、彼女が今にも泣き出しそうな顔をしていることに気づく。

普通の、良くも悪くも丈夫な彼女なら考えられないその表情が、何か深刻なことが起きていることを表す。

僕は言われるままに右手を差し出した。

彼女は僕と握手するかのように手を伸ばし、そしてその手は僕の手を……掴むことなく通過した。

いや、通過したのは僕の手のほうだろうか。

僕が事態を把握する前に、彼女は床にへたり込み泣き出してしまった。

そんな彼女に僕は声を掛けることが出来なかった。

その瞳からあふれ出る雫を止めることが出来なかった。

小一時間も経つただろうか。

ようやく彼女が落ち着いたようなので、話を聞いてみる。

……僕自身、なんとなく予想はできているが、確信がもてていないわけではない。

「何がどうなってるのか教えてほしいんだけど」

僕がそう言くと、彼女は話し始めた。

「私ね、幽霊が見えるの」

私が小学五年の時。

今でもよく覚えてる。思い出したくは無かったんだけどね。

一番仲がよかった子が交通事故で死んだの。

朝、その子が学校の前にぼーっと立ってた。

それで「おはよう」っていいながら肩を叩こうとしたら……。

さっきみたいに手が通り過ぎた。まるでその子なんてそこにいないかのように。

その時の私は怖くなって逃げ出したんだけど、朝のホームルームで、その子が登校中に交通事故に巻き込まれて死んだって先生が言った。で、つまり何が言いたいのかっていうと、

「あんだ、幽霊、よね？」
予想はしていた。

でも、それはつまり僕はもう死んでるということだろうか。

「っていうことは、死んでる……のよね？」

僕に訊かれても分からない。

しばし沈黙の時間が流れる。

心の整理がつかない。

でも、そういうことなんだろう、きっと。

「もし僕がもう死んでるんだとしたら、なんで僕は幽霊になったんだろう？」

「それは、現世に心残りがあるから、とかでしょ、多分」

「心残りが……」

心当たりがない。

……いや、今こうして幽霊として以上無いわけではないのだろう、多分。忘れてしまった記憶のどこかに関係するはずだ。

「ねえ、あんだが死んだ今、もうどうしようもないことなんだけど、その……先月のこと覚えてる？」

先月？

記憶を辿る。二月、二月、二月……。

「あ」

目の前が暗転し記憶がフラッシュバックする。

商店街へ寄り道をした後、家へ帰る途中だった。雨の降る金曜日。

交差点の赤信号をぼーっとしながら待つ。

右の方からトラックの来る音が聞こえる。

そして、

「え？」

歩道に立っている僕のところへ突っ込んでくる。

トラックに気づくのに遅れたことと、ポケットに手を突っ込んでいたことが災いして、とっさに動くことが出来なかった。ハンドルに突っ伏して寝ているトラックの運転手の姿を最後に見た気がした……。

映像が目の前の風景に戻ってくる。

それと同時に、もう一つの重要な記憶も蘇ってきた。

何で今まで忘れていたのだろう。

何で屋上で気づかなかったんだろう。

何で彼女のリアクションで思い出せなかったのだろう。

確かに僕は記憶を無くしていた。

二月十四日から。

曜日が同じだから気がつかなかった。

僕はあの時と同じように学ランのポケットに手を突っ込む。

手に触れたのは、最後の瞬間まで触れていたものと確かに同じ感触。リボンのついた箱を取り出す。

「思い出したよ。先月のお返し。これを渡すのがきつと僕の心残りだ」

二月十四日バレンタインデー。三月十四日ホワイトデー。簡単なことだ。

僕が彼女に差しだした箱を確かに彼女は受け取った。受け取ってくれた。

彼女が何か言っている。

けれど、僕はもう死んでしまっている。そんな僕は彼女の返事を聞くことができない。

僕の意識は急速に遠のいていった。

心残りが無くなった幽霊は成仏する。当たり前のこと。

二月十四日

「本命だからね」

そう言つて渡された。

正直意味が分からなかった。

僕自身、そもそも二月十四日とは縁のない人間だ。

それに、彼女との接点もない。最大の接点はクラスメイトだということだ。

それが何故、わざわざ雨の降る土曜日に僕の家まで本命チョコを届けに来るのだろうか。

「返事は来月でいいから」

彼女はそう言つて僕に何も喋らせずに帰って行った。

僕はしばらく玄関前で呆然としていた……。

二月十四日午後三時半

「それにしてもひどい罰ゲームね」

彼の家を去った後、彼女がつぶやいた言葉は雨音にかき消され、誰の耳に入ることもなく虚空に消えた。

【B】

「あ」

宿題をしようとして鞆を開けたところで、英語のノートを学校に忘れてきたことに気づく。

土曜日の午後。二時少し前。

天気は曇り。でも、雨が降りそう。

厳しいことで有名な英語の先生に、ノートを忘れたから宿題が出来なかったなんていう言い訳が通用するはずもない。

面倒だけど、取りに行こう。

今日は土曜日だから、教室も開いていると思う。

学校までは歩いて十分くらいだけど、途中で雨が降り始めた。

土砂降りではない。言葉で表わすなら『しとしと』といったところだろうか。

念のためと思って傘を持って家を出たのは正解だったみたいだ。雨に濡れるのは好きじゃない。

学校に着き、教室へ向かう。

五時から塾があるし、それまでに宿題を終わらせておきたいな。そんなことを考えながら教室に入った。

そこには思わぬ人物の姿があった。

「なんであんたがいるの？」

完全な不意打ちだったので思わず声を掛けてしまった。

教室にいたのは川内一登。今、私が一番会いたくない相手だ。

普通の学校のように、他に人がいれば気まずいことにはならないのだろうけど、生憎この場には私と彼しかいない。

彼は少し間をおいてから言った。

「お前こそ何しに来たんだ」

少なくともこの質問に他意は無いようだ。

……先月のことを何とも思っていないのだろうか。

「私は、忘れて帰った英語のノート取りに来ただけ」

嘘をつく理由もないので正直に答える。

答えながら、自分の机からノートを取り出す。

「ふーん。……あ、そういえば、今日って何日だった？」

自分で質問しておいて『ふーん』だ。これが彼の良くない所。

「……三月十四日」

と答えてから、今の質問に彼が何かしらの意図を込めた可能性に思

い当たる。

しかし彼は

「十四日か……」

と呟いただけで、考え込んでしまった。

「で、あんたはなんているの？」

別に知りたいわけではないが、最初に訊いたことなので、もう一度訊いてみる。

彼はやはり少し間をおいてから語り始めた。

「いや……それがさ……」

いろんなことが思い出せないんだ。

別に記憶喪失とかじゃない……とは思うけど。

さっきまで、学校の屋上で寝てたんだよね。

それで、教室に戻ってきたんだけど、今日が何日も分からなくてすごく焦った。

さっき川村さんに聞くまで結局分からなかったし。

寝ぼけてるわけじゃなくて。

それに……何か大事なことを忘れてるような気もして。怖い。自分のことが分からないことが。

大事なことを忘れている気がするんが。

「僕はどうしたらいいんだろう」

彼の話聞いて、三年前の記憶が頭をよぎる。

そんな可能性は信じたくなかった。

でも、過去の記憶が頭から離れない。

「ねえ……手を出して」

声が震えていることを悟られないように精いっぱい頑張ったが、結局震えていたかもしれない。

彼は一瞬躊躇し私の顔を見て、それから手を出した。

私は、私が思っている可能性を否定するために彼の手に触れようと
して手を伸ばす。

……そして、掴んだのは何もない空間。

今自分が直面している現象と、封印が解かれた三年前の記憶によっ
て、私は感情をコントロールできずに泣き崩れてしまった。

どのくらい経ったのだろうか。ようやく気分が落ち着いていた。

時計に目をやる。三時過ぎ。どうやら一時間近くも泣いていたよう
だ。

彼はまだ私の隣に立っていた。

「何がどうなってるのか教えてほしいんだけど」

この質問に対して答えは不要だろう。

恐らく、彼は既に自分で答えを出している。

そう思い別の話を始める。

「私ね、幽霊が見えるの」

三年前に私が体験したこと。

親友が死んだこと。

その幽霊が私の前に現れたこと。

「あんだ、幽霊、よね？」

今度は声が震えてることは無かったと思う。

「っていうことは、死んでる……のよね？」

私の問いに彼は答えない。

私にも彼にも本当のことは分からない。

もしかしたら、これは私のただの悪夢かもしれない。

「もし僕がもう死んでるんだとしたら、なんで僕は幽霊になったん

だろう？」

唐突に彼が訊いた。

どうやら彼は自分が幽霊であるという可能性を受け入れたようだ。

……それができるのはとても強い人。私はそう思う。とても私にはできないから。

「それは、現世に心残りがあるから、とかでしょ、多分」

幽霊について詳しく知っているわけじゃない。

でも世間一般にはそう言われているし、それが一番自然な考えだ。

「心残りか……」

彼の心残り。それはもしかして……。

いや、でもそんなことは無いだろうと思う一方で、例えば心残りとは全く関係のないものだったとしてもやはり聞きたいという気もする。でもやっぱり……と思考が堂々巡りを始めそうになったので、思いきって聞いてみる。

「ねえ、あんたが死んだ今、もうどうしようもないことなんだけど、その……先月のこと覚えてる？」

そうは思っても、直接言うのは恥ずかしい。

彼はしばらく考えるしぐさをして見せ

「あ」

と呟いた。そして制服のポケットから綺麗なりボンのついた赤くて小さな箱を取り出す。

「思い出したよ。先月のお返し。これを渡すのがきつと僕の心残りだ」

彼が差し出した箱を受け取る。その箱にはきちんと重みがあった。

私の手から透けて落ちたりはしない。

「ねえ、これ……」

彼に説明をしてもらおうと思ったのだけれど、私の目の前から彼の姿が急激に薄れている。

「ねえ、これって、どういうこと……」

箱と共にしているメッセージカード。

「ねえ……」
しかし、彼は何も答えないまま、私の目の前から存在が消えてしまった。

三月十四日午後三時半

「遅いよ……」
誰もいなくなつた教室で呟く。

もちろん、最初はただの罰ゲームだった。

特に好きでも嫌いでもない、『男子』という集団の中の一人としてしか認識してなかった。

でも、罰ゲームとは言え”本命チョコ”をあげた相手のこと。気になるのは当たり前。

私はきつと彼のことが好きだったと思う。

「中学生の恋なんてきつとそんなもんでしょ。きつかけなんて別にどうでもいいじゃない」

自分にすら聞こえるかどうかの大きさを呟いた私の声は、本格的に降りだした雨のせいで誰の耳にも届かなかった。

私に残されたメッセージ。

『僕も貴方が好きです』

この物語はフィクションです。実在する人物及び団体とは一切関係ありません。

土曜日。印刷室。文芸部の活動。

僕は川村さんと二人で文芸部の活動に励んでいた。年に数度発行する部誌の印刷と製本作業だ。

各学年が持ち回りでやるのだけれど、僕たち二年生の部員は僕と彼女しかいないので、二人で作業することになる。

とはいっても作るのはせいぜい三十部なので、多少の時間はかかるものの二人でこなせない量の作業じゃない。

「ところで、一つ聞きたいんだけど」

二人とも今まで黙々と作業をこなしてきたけれど、どうしても聞きたいことがあったので僕は彼女に声を掛けた。

「ん？なに？」

彼女は作業の手を止めずに聞く。

「あの……。そんなに僕のこと嫌い？」

小学校こそ同じものの、僕が彼女の存在を知ったのは小学四年生の時。

同じクラスの隣の席になり、本の話をしたのがファーストコンタクトだったはず。

僕も彼女もどちらかと言えば読書家で、本の感想を言い合うのが日課に近いものになっている。

かといって、お互いがお互いに依存せず、僕にとってはとても心地いい距離感で接してくれる。

僕はあまり相互依存の関係の中に入りたくないのだから、傍目から見れば友達づきあいの悪い奴に見えるかもしれない。

「え？嫌い？何のこと？」

「えーっと……。川村さんの作った話」

全部読んだ訳じゃない。ちらっと見えた「side A」と書かれ

いる部分の後半。僕にとってそれはあまりに気になる内容だった。

「うん。それが」

彼女はシラを切っているだけなのか、それとも本当にやましい気は無いのか、僕には判断がつかない。

「川村さんがそのまま作品に出てきてるのは別にいいけど、川内っていうのは明らかに僕でしょ、名前こそ違えど。……僕のこと、死んでほしいくらい嫌い？」

「最後に書いてあるじゃない。『この物語はフィクションです』」

でも、どう考えてもあれは僕だ。

そう。二月十四日の出来事さえ。

もっとも、彼女が雨の中届けに来てくれた本命チョコが罰ゲームだったからかどうか、僕に知る由は無いのだけれど。

「まあ、私はあんなふうに、教室に二人きりっていうシチュエーションがいいなって思ってるけど」

何が？

「で、今日の午後はどうするの？」

そう聞かれ腕時計に目をやる。十一時半。作業ははかどっているよ
うで、この調子なら昼過ぎには終われそうだ。

「午後？別に何も無いけど」

「ふーん。じゃあ私は、教室に忘れた英語のノートでも取りに行こうかしらね」

彼女のセリフに何かの意味が込められていることは、彼女の表情から理解できたけれど、どういう意味かという肝心な部分から
ない。

そんな僕の表情を見てか、彼女は付け加えた。

「貴方は屋上で昼寝でもしたら？雨が降らないうちに戻ってきた方がよさそうだけど。雨が降り始めるのは二時くらいじゃないかな」

……。

十二時過ぎ。作業が終わり、彼女は教室の方へ向かう。
彼女の発言の真意を知るべく、僕は彼女の作った話を最初から読み始めた。

物語を読み終えるまでの数分間の間に外では雨が降り始めたようだ。
彼女の予定より二時間早い。

「これじゃ屋上で昼寝なんてできそうにないな」
声に出して呟いてみる。

さっきのメッセージは、二時に教室に来い、ということだろう。

つまり、先月の答えを聞かせてもらおう、ということなんだろう。

今日は三月十四日だ。

きっと彼女は二時まで待つのだろう。

土曜日の午後、教室から誰もいなくなるまで。

あるいは、僕に時間の猶予をくれたのかもしれない。

でも僕はもう、一握りの勇気と、チョコレートのお返しを持っている。

彼女になんて言うべきか、ずっと悩んだけど、きっとこれが正解
なんだろう。

全く飾りっ気の無い言葉だけれど、僕の本心。
決して、彼女に言わされているわけじゃない。

『僕も貴方が好きです』

(後書き)

特になし

以下内輪話

- 「須賀」から辿りついた方はぜひコメントでも下さいなw
- 一応矛盾点を修正しました(黒板の日付のくだり)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9332u/>

十四日午後三時半

2011年10月7日05時31分発行